味の記憶

卵焼きエレジー

―文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！

イラスト：服部淳子

●アラカンと卵焼き

兄弟が2、3歳の頃の写真を見ると、兄サダオは、チョコレートの山に埋もれ、手編みセーターに半ズボンでハイソックス、頭はボブカットでニッコリ澄まし顔。時期は朝鮮戦争が終結に向かう頃のものだが、その頃にしてはハイカラである。

片や、六歳年下の次男（私）は、いつも着古した丹前に着物姿、帯にチープなアルミ刀の二本差し。なぜか片手に抱えきれないような大きなケーキ箱を持ち、誰にも渡すかとカメラを睨みつけている。頭は刈り上げ。時期は50年代末だが終戦直後の焼け跡期のよう。時系列がまるで逆だ。父の転勤で市内から郡部に移り住んだせいだろう。

宮崎県の広瀬は、今は宮崎市内に編入されているが、明治期までは半農半漁の漁村であった。その名残か、人々の気性は荒っぽく喧嘩っ早い。私は2歳から6歳までそこで育ったが、町の気風が人格形成に少なからず影響したと思う。

当時は1年1年の社会変化が著しい高度成長期で「巨人・大鵬・卵焼き」といわれた時代。私にとって懐かしい思い出は、大好物の卵焼のふんわりした食感と甘味と共に蘇る。町には1軒だけ映画館があった。その名はわかば館。このひなびた映画館は40、50人も入れば満席になる。後部は取り外し自由の木製椅子席が並び、最前列は土間に板敷きで、上に莫蓙を敷き観客席にしていた。客席に勾配などなく、スクリーンは一段高い壇上にある。演目は一昔前のものが多く、映写機が熱くなるとフィルムがすぐに切れてしまう。上映中にいきなりブーンと音がしてスクリーンが真っ白になるのだ。スタッフがフィルムをつなぎ合わせる間、観客はしばし休憩。ラムネを飲みながら世間話に興ずる。のどかなものだ。

3歳の私は最前列の土間板敷きで立ちっぱなしで映画に見入った。スクリーンにはアラカンの鞍馬天狗や市川右太衛門の旗本退屈男、片岡知恵蔵の次郎長が登場。時代劇ヒーローにすっかりかぶれて、遊びに出る時は、冒頭に述べたように、着物に二本差しスタイル。遊び場の縄張り争いでは、何かというと「成敗してくれる！」と雄叫びをあげていた。

3歳の私は最前列の土間板敷きで立ちっぱなしで映画に見入った。スクリーンにはアラカンの鞍馬天狗や市川右太衛門の旗本退屈男、片岡知恵蔵の次郎長が登場。時代劇ヒーローにすっかりかぶれて、遊びに出る時は、冒頭に述べたように、着物に二本差しスタイル。遊び場の縄張り争いでは、何かというと「成敗してくれる！」と雄叫びをあげていた。

それが1年もたつと、マンボズボンに麦藁帽姿（テンガロンハットのつもり）に早変わり。腰には二丁拳銃ならぬゴム縄銃をさし、突っかかってくる相手には「よしな、怪我するぜ！」と、雄叫びからクールな決め台詞に進化する。これもわかば館で見た日活スター、石原裕次郎や小林旭の受け売りだ。

そして、映画に行く時は必ず母の作ったおにぎりと生姜の味噌漬け、卵焼きを持参。映画に見入りながら、夢中でぱくつき、のどが渇くと売店のラムネを買うのが何よりの楽しみであった。

●ゲジゲジ退治に卵焼き

卵焼きといえば、ゲジゲジ退治に持参した卵焼きの味は今でも忘れられない。

当時の我が家は裏山が迫っていて、ムカデやゲジゲジがひんぱんに家の中に入り込んだ。幼い頃髪が薄縮れッ毛だった3歳上の姉マキコは「ゲジゲジは頭髪に付くと禿る」という迷信をどこからか聞きつけて来て、それをひどく気にし、「兄ちゃん退治して」と兄サダオに懇願した。そこで妹想いのサダオと私の兄弟2人に近所の悪ガキ連も加わり、さっそく探検隊を組織。ゲ

ジゲジ退治に乗り出すことになったのだ。といっても、他の連中はガキ大将の兄の招集だから嫌応もなく駆り出されたのだが、メンバーは7人。まずは隣家の鉄道屋の兄弟。弟マサアキ(6)は粗暴なことで近所では有名であった。一つ下の私の喧嘩ライバルでもある。兄シゲキ（10）は抜け目がなく喧嘩で形勢不利と見ると誰よりも逃げ足が速い。

それに、水鼻で泣き虫のヒロシ（9）とすばしっこい弟（6　名は忘れた）の兄弟二人。我が家とは少し家が離れた農家の息子たちで、祖父は明治生まれの退役将校で、いつも仁王立ちで畑の見張りをしていた。無断で果樹をちぎって食べようものなら、捕まったが最後、とって食われるらしいと悪ガキ連に恐れられていた。

もう一人はボンボン育ちだが周りからは“狂犬”と恐れられていたツヨシ（11）。兄の親友だ。隣町の会計士の一人息子だが、上に3人の姉と妹一人に囲まれて、家では息苦しいらしく、遠征して我が家に遊びに来るのだ。喧嘩っ早くて、気に入らないと年上でも構わず突っかかっていく。負けても際限なく向かっていくことからその綽名が付いた。その反面、自分のおやつ代をすべてはたいて、近隣の野良犬や野良猫に餌付けするような優しい所もあった。

探検隊の弁当をこしらえてくれるのは女子組。メンバーは私の姉マキコと通称・銀行屋のヒトミ（4）、それにツヨシの妹で私の姉と同級のケイコ（8）だ。

ヒトミは1円玉と5円玉を集めて当時で5000円以上の貯金をしていた。私はそれに習い、貯金箱をいくつも作りおやつ代のお釣りを貯めては家に隠していた。そのため、兄姉からは一時期“守銭奴”と呼ばれたこともある。

ともかくも、総勢7人の探検隊は、それぞれ頭に鍋蓋や風呂敷を被り、ニービー弾（かんしゃく玉）と、腰には木刀を差して、懐中電灯を持ち、いわば“完全武装”して我が家に集合。女子組が羽釜の飯でおにぎりをつくり、おかずに生姜の味噌漬けと卵焼きを添えて送り出す。

「絶対ゲジゲジ退治してネ！」と銃後の声援の中で、ヒトミが「えっ、マユミも行くの？　危ないからやめときな」と一つ下のマユミ（3）を、まるで年の離れた年長者のように諭す声がする。

「いやじゃ、絶対行く！」マユミはマサアキの妹。彼女は弁当作りからも遠征隊からも外され、不満なのだ。いつも汚れた涎掛けをかけていて一見幼く見える三歳だが、噛み付いたら雷が鳴っても離さない“吸血鬼ブラッシー・マユミ”と恐れられていた。マユミは言い出したら聞かない。仕方がないので、サダオが面倒を見るということで連れて行くことにした。

これで総勢8人。手作り弁当と水筒をリュックに詰め、ゲジゲジの棲み処を裏山の洞窟と見当をつけて、いざ出発。そこは戦時中の防空壕で、蝙蝠もいれば蛇やムカデ、ゲジゲジが棲息するおぞましき洞穴である。

●戦闘開始

いつものことだが、先遣隊は私とマサアキ、ヒロシの弟の年下組。真ん中にヒロシとシゲキにツヨシ、最後尾がサダオとマユミだ。普通、逆ではないか？

「ニイちゃん、何で僕らが先じゃと」

「柔道や剣道では最後に大将が出てくるが。俺が最後列で万一に備え、お前たちを守るんじゃ」

いつも兄の言い草にはだまされる。あんまり不平を言うと拳固が飛んでくるから不承不承従うしかない。藪をこぎ草木のとげや蜘蛛の巣を掻き分け、目的地の洞穴に到着。すでに皆の顔や腕は傷だらけである。

「お前たちが先に入れ」と無情な兄の指令。懐中電灯を照らして、おそるおそる奥へと向かう年下組。ヒンヤリした空気におののき、半分目を瞑り歯

を食いしばり進んでいく。洞窟内の生臭い匂いが不気味さを増幅する。

と、その時、暗闇に何かが一斉にザワザワと羽ばたく音がした。蝙蝠だ。われら3人は無我夢中で洞窟の地べたにニービー弾を投げつけ破裂させた。すると、蝙蝠が一斉に洞穴の中を飛び惑う。その鳴声から逃れるようにやみくもに木刀を振り回し、地べたの石ころを拾っては天井に向かって投げつけた。

後ろからヒロシが「もうだめじゃあ、帰ろう」と泣き声混じりに訴える。外へ向かって走り出す足音はシゲキだろう。その後ろでツヨシが「逃げるなー」と怒声をあげ、木刀をぶんぶん振り回しながら、二人を引き連れ援護しに駆けつけた。皆で洞窟の四方八方にニービー弾を投げつけ、やみくもに木刀を振り回す。パニック状態である。その中で最後列の兄は落ち着いた声で「ニービー弾で右壁を狙え！」「次は上！」「左～」と矢次早に指令を出す。その指令は的確だが、どうやら本人は入り口近くにいるようだ。

洞窟の中はニービー弾の煙でお互いの姿もよく見えない。仲間のゴホゴホ咳をする声だけが頼りだ。振り回す木刀やニービー弾が仲間に当たらないかとヒヤヒヤするが、蝙蝠の来襲を恐れ、やめるわけにはいかない。その間20分、いや実際には10分程か。

皆のニービー弾も尽きた頃、「プァップァッパ～」とラッパ係のマユミの叫び声。続いて兄のものものしい号令が飛んだ。「よーし、みな退却～」皆それを合図に一目散で洞穴の外へと駆け出した。途中でつまずく者もいて体中埃だらけである。洞穴にいた時間がどれほど長く感じられたことか。ひと息ついて、兄がいささか興奮した面持ちで皆の労をねぎらった。

「よくやった、これでゲジゲジも当分は出てこんが。今日はこのくらいにしとこう」それにしても、兄だけが汚れていないのはなぜなのか？

●勝利の美酒ならぬ卵焼き

まあ、その疑問はおくとして、勇気を振り絞って洞窟に入ったという達成感が皆を誇らしい気分にさせていた。もっとも、その成果たるや怪しい限りだが。

探検隊は裏山の野原に出ると、車座になりまずはヒリヒリする喉を水筒の水で潤した。そして、サダオが皆の労をねぎらうかのように、おもむろに女子組が作ってくれた大きな弁当をリュックから取り出して、マユミに命じて中に入っているおにぎりと卵焼き、生姜の味噌漬けをアルマイト皿に盛り、メンバーに配って回らせた。

「よくやった、ほれ、おにぎりも卵焼きも3個ずつあるぞ」

順々に配り終えると残りは自分の皿に。あれ？　サダオだけ4個盛りだッ！　皆の視線がジーッとサダオの皿に集中するのを意識したのか、「1個ずつ余ったからな、誰が食べるかで喧嘩になるとよくないから、とりあえず俺が預かっておく」

うーむ、いつもこの調子である。汗を流したのはわれわれだが、美味しいところは最後に持っていく。わが兄ながら油断もすきもない。

ともあれ、極度の緊張からの解放感も手伝って、その時に食べた卵焼きの何と美味しかったことか。未だばくつく心臓の動悸を、ふんわりした食感と甘味がすっかり静め、ほっとさせてくれた。

弁当や出てくる膳で好物は最後までとっておき、ゆっくり味わって食べるというのが当時の私の習性だったが、今は最初にかぶりつくことにしている。というのも、大事な好物を兄にさらわれてしまう苦い思いを幾度となく体験したからだ。悔しいかな、この時もそうであった。

皆が大方を平らげた頃、やにわに「セツオ、背中にゲジゲジがついとる！」と兄の声が。「うへぇー」とあわてて立ち上がり、背中を手で必死で払う私。と、その隙に最後に大事にとっておいた卵焼き一切れを「残すのはもったい

ないから俺が食べちゃる」と兄にさらわれてしまった。かつがれたのである。「何すっとォ、最後にとっておいたのに！」とベソかきながら抗議する私に「ぼやぼやしとるお前がドン臭いんじゃ」と無情な返し。

●また一つ伝説が

山を降りると、出迎える女子組みにゲジゲジ退治の顛末を面白おかしく語って聞かせるサダオ。実際の探検よりよほどエキサイトで、また子供たちの遊びの伝説が一つ増えることに。

しかし残念ながら、この後もゲジゲジは我が家に侵入した。その度に、私とマユミ、マサアキで退治に何度も向かうことになったのだが、まあ、肝試しにはもってこいではあった。

今でも卵焼きを食べるとつい甘く切ない気分になるのは、このゲジゲジ退治を思い出すからだろう。私にとって卵焼きは悔しくも忘れられない味なのだ。

了